



今回は、アントロポスSEKIシンポジウムの報告です。

◇ 高校生主催の学術シンポジウムを関高校で開催しました！

日時：平成30年12月16日 会場：関高等学校 彩雲館

主催：関高等学校 中部学院大学 参加者：40名

発表者とテーマ：

水野友有（心理学・中部学院大学）

「子どもの心、大人の心 人間の初期発達に着目して」

今村 薫（人類学・名古屋学院大学）

「アフリカの子ども～狩猟採集民、牧畜民、農耕民の比較から～」

山田康弘（考古学・国立歴史民俗博物館）

「子供から大人へ ～縄文時代の場合～」

竹ノ下祐二（霊長類学・中部学院大学）

「ひとりだちするサル、ひととともに生きるヒト」

関高等学校自然科学部（片岡幸大・小川智司・加藤翔紀・藤根寛也）

「コドモをとりまくゴリラの社会構造」

## <シンポジウムの趣旨>

今回のシンポジウムは、大学ではなく、あえて高校開催としました。高校を地域の「知の拠点」としようとの試みです。アントロポスとは、ギリシア語でヒトを意味する言葉。このシンポジウムでは、心理学、人類学、考古学、霊長類学の専門家、関高校自然科学部霊長類研究班の生徒が、各々の見解を発表し議論を交わします。テーマは「大人になるとはどういうことか」「子ども」「大人」「成長」をキーワードに、ヒトが子どもから大人になる意味を問います。



### 【大人になっていく過程とは？】

自分のまわりにいる他者との交流によって、もう一人の自分（俯瞰してみる自分）が存在してくる。成長するにしたいが、他者視点と自己視点をもつようになる。

水野友有氏の講演より



### 【狩猟民の子ども、牧畜民の子ども】

狩猟民の子どもは大人を真似て「ごっこ遊び」をする。この遊びには技術伝達の機能もある。牧畜民の社会では、小さい頃から様々なお手伝いをさせる。狩猟民よりも社会階層がハッキリしているためか。

今村薫氏の講演より



### 【縄文人の子どもと大人】

縄文人の子どもは幼児期から集団生活に参加した。やがて男の子は成人男性と、女の子は成人女性と行動をともにすることが多くなり、労働力としても期待されるようになっていったようだ。

山田康弘氏の講演より



### 【ヒトの自立とは？】

ヒトの生産活動は、必ずしもエネルギー生産上の貢献だけではなく、他者が価値を認めてくれているか、社会貢献しているかを認めてくれるかどうかで成り立っている。

竹ノ下祐二氏の講演より



### 【ゴリラのコドモの成長】

ゴリラの成長はヒトに同じくゆっくりとしているので、長期の観察が必要。ここ一年、メスのコドモに新たな動きが見られた。オトナに向けての成長の可能性もある。

関高校自然科学部の講演より

### <参加者の感想>

- ・様々な専門家からの「大人になるとは？」という講演、面白かったです。現代、縄文、狩猟民、牧畜民など、時代や環境は異なりますが、大人になるということに対して儀式が必ずあるというのは、ヒト以外の生物との大きな違いかなと思いました。縄文人もアフリカの狩猟民も大きな覚悟のいる儀式があるのですが、現代はただセレモニーがあるのみ。その違いが、現代人がなかなか大人になれない一因でもあるのかなと考えました。
- ・研究者たちが討議する中で議論が深まっていく様子を目にする機会が得られたことは、高校生たちにとって、とても良い刺激になったのではないかと思います。
- ・大人とは、ヒトとは、そして社会とは。普段は考えない新たな視点を与えてもらった。高校生にして着実に経験を積む生徒たち。うらやましすぎる！
- ・討論の冒頭、今村先生から高校生に対する質問が相次いだ。この質問が議論を深めるきっかけとなった。自身の考えを確かめるかのように、物怖じせず丁寧に答える高校生の姿が頼もしかった。